

金子内閣府大臣政務官（金融担当） 就任インタビュー



金子 容三(かねこ ようぞう)

生年月日	昭和58年2月1日
出身地	長崎県
選挙区	長崎第3区
趣味	ピックルボール

※略歴詳細：[官邸ウェブサイト](#)



高市内閣発足に伴い、昨年10月22日に就任した金子容三内閣府大臣政務官（金融担当）に、意気込みや日頃の活動等について伺いました。

一はじめに、内閣府大臣政務官（金融担当）に就任され、その意気込みについてお聞かせください。

私は、国会議員になる前は18年間証券会社に勤めていたこともあります。国会議員としても金融行政に携わっていきたいという強い思いがあります。これから日本の成長において、金融の役割というのは一丁目一番地であり、非常に重要な位置を占めています。金融機能が高度化していく中で、更なる日本経済の成長に貢献していくようしっかりと頑張ってまいります。また、足元では、多くの日本の方が経験したことのない「金利のある世界」へ移行しましたので、リスク管理や投資家保護を今まで以上にしっかりとしていく必要があります。機関投資家だけではなく、個人

の方々もポートフォリオの中に長期の債券を組み入れて資産形成を行うことも考えられると思いますし、こうした転換点の中で、金融というものを、法人の成長や個人の資産形成に結びつけていくようにしたいと思っています。

一国会議員を目指すこととなったきっかけについてお聞かせください。

父も祖父も国会議員という環境で生まれ育ちましたので、私自身、国会議員になるという気持ちはずっと持っていました。他方で、日本の経済を動かしているのはサラリーマンですので、国会議員を目指すにしても、まずは社会で実務経験を積む必要があると考えました。国の政策の一丁目一番地は経済・金融

であると思っておりましたので、就職先は、ダイナミックな市場と関わる証券会社を選んで、18年間働きました。

私は金融に限らず、日本のイノベーションが非常に遅れていることに強い問題意識を感じていました。他国、特にアメリカにおいては、イノベーションを起こした企業が時価総額ランキングの上位に入っていますが、それと比較すると日本のランキングは昔からあまり代わり映えせず、新しい事業を起こして成長させていく土壤が日本にはまだまだ足りないという認識もありました。そのため、証券会社に勤めた最後の3年間は、いわゆる金融のイノベーションを創出する専門部署を立ち上げました。マーケットによって浮き沈みする収益モデルではなく、新しい金融サービスを作り、新しい企業の成長の支援の仕方を模索していくかないと、いつか証券会社としてやっていけなくなるだろうという強い危機感を感じながら新部署に携わってきたのですが、こうした新事業における収益化という経営上の課題に直面する中で、日本の大企業、また日本全体で「挑戦して失敗して、また挑戦していく」ことを許容するような慣習が根付いていないことも認識しました。国の法律や規制、世間の慣習を抜本的に変えていかない限り、日本のイノベーションは世界に取り残されていくのではないかという強い危機感が、国会議員になった大きなきっかけだったと思います。

一国会議員としてこれまで取り組んでこられた中で、印象深い出来事は何でしょうか。

金融担当の大臣政務官の直前は、防衛大臣政務官をしていたのですが、私が国会議員になるずっと前から、地元の佐世保市にある米軍の弾薬庫の移設及び返還の問題が課題として残っていました。私が政務官になり、この課題を前に進めたいという強い思いを持って1年間担当の方々と話し合いや調整を重ねた結果、関係する皆様のご助力もあり、日米合同委員会において、移設先の配置案について合意を得ることができました。地元の方々が長年求めていたこと

が実現し、皆様の笑顔や喜びを感じることができたのは、政治家としての醍醐味だなと感じましたね。



[写真：インタビューの様子]

一金融担当の政務官として、今後積極的に進めていきたい政策についてお聞かせください。

この数年で、コーポレートガバナンス改革がかなり進んできました。特に、岸田政権以降に「資産運用立国」の取組が重視されてきた結果、企業もいわゆる収益性や資本効率を意識した経営スタイルを変えて、（今の一時的な株価上昇よりも前から）投資家から評価されるようになってきたと思っています。企業が投資家から評価されるためには、株主還元を行うことだけではなく、企業が成長する姿を示し、その成長のための投資を実行していく必要があります。このような「成長投資」につながるよう、コーポレートガバナンス改革を更に進めていきたいと強く思っています。

また、スタートアップ政策も積極的に進めていきたいと考えています。私が証券会社でIPOに携わっていた当時は小粒上場が多かったのですが、企業に対しては上場前から成長を維持していくような支援が必要になります。他にも、非上場企業のM&Aや、大企業によるスタート

アップ企業の買収などのM&Aをもっと増やして行くことでスタートアップ企業の成長に繋がると考えており、制度面での支援（規制緩和等）を進めてまいりたいと思います。

—休日の過ごし方を教えていただけますか。

中々休みが取れませんが、最近は「ピックルボール」（パドルというラケットでプラスチック製の穴あきボールを打ち合うスポーツ）にハマっています！テニスと卓球を合わせたようなスポーツで、老若男女問わずできるので、今は家族全員で楽しんでいます。私は休日も地元でのイベント出席などが多いので、プライベートでは家族と過ごす時間をどう確保するかが優先事項となるのですが、最近では、一緒にピックルボールをしているときが一番落ち着く時間ですね。

—ピックルボールは初めて知りました。お忙しい中で、健康面で気を遣っていらっしゃることはありますか。

ピックルボールは、アメリカでは4人に1人がプレイしたことがあるとも言われているので、今後日本でも人気になるかもしれませんよ。

仕事柄会食が多いのですが、会食が続いた後は、玄米粥と味噌汁など健康に気を遣った食事を心掛けています。また、時間を作つてジョギングをするなど、体型維持や健康に気を付けていきたいと思っています。

—最後に、政務官就任以降にお感じになった金融庁のカルチャーやイメージを教えてください。

政務官に就任する前は、正直、金融庁は怖いイメージもありましたが、政務官に就任してから、そんなことはないと知りました。金融庁の役割の変遷とともに変わってきた面もあるのかかもしれませんね。金融機関の監督・管理だけではなく、金融を発展させていくという前向きな役割が加わり、金融機関にとって身近な存在に変わっていったのだと思います。金融庁の皆さんには、しっかり監督を行うのはもちろん、これからも現場の金融機関の方と積極的にコミュニケーションを取りながら、風通しの良い関係を構築していくってほしいです。そうすれば、金融庁はもっと良い組織になると思います。

以上

(インタビュアー：広報室長 久米 均)



〔 写真：金子大臣政務官とワニーサ 〕